

第62代横綱 おおのくにやすし
大乃国 康

成績が悪くても、全力を尽くして戦ってこそ、横綱。たとえ、「こんなの横綱の成績じゃないだろう」と言われたとしても、やっぱり全力を尽くして戦うという姿は潔いと私は思っています。

数年前に、「第62代横綱 大乃国の全国スイーツ巡業」という日本全国のおいしいスイーツを紹介する本を出して以来、「スイーツ親方」なんて呼ばれるようになったからねえ。

お菓子って、不思議な力を持っていてね。お菓子を食べるといのは、至福の時なんですよ。ホラ、甘い物を食べている人で、怒っている人はいないでしょう。

食べるということは、人間が生活していく中で、とても大事なことです。

「これから食べるぞ」という、食べる前の期待感。そして、食べている時の喜び。食べ終わってから
の満足感。また、みんなで食べることで、みんなの顔が自然にほころんで和やかな雰囲気になるんです
ね。食べることには、人間の喜びと幸せがあふれていると私は思っています。

北海道の芽室町というところで生まれました。小さい頃からあんこが大好きでした。そもそも甘い
物が好きだったんですが、今のように体が大きかったわけじゃなかったんです。

2歳の頃、東北北海道の健康優良児に選ばれたくらいだから、子供にしてはがっちりした体格だったん
でしょうけど、肥満児とかではなかったです。

小学生の時は、夏は野球、水泳、冬場はスキー、スケートとスポーツは一通りこなしていましたね。
特にスキーは得意で、6年生で3級を取ったくらい。

中学に入ってから、身長も伸びてきたし、体重もそこそこ増えてきたので、柔道部に入ったんです。
成績はわりとよかったんですよ。北北海道大会で優勝したり、柔道とは関係ないけど、陸上の大会に借
り出されて、砲丸投げをやっていきなり優勝したということもありました。

それで、砲丸投げで高校へ推薦入学の話をお願いしたんです。一度も練習しないで大会に出て、優勝
して、推薦入学でしょう。特別勉強が好きなわけでもなかったし、スポーツ推薦で高校に進学できる
というのは、私にとっては魅力的でした。

ちょうど中学3年の夏休み、田舎に大相撲の巡業が来たんです。中学の柔道部員たちで見に行ったん
ですが、その時、なぜかまわしを締めさせられて、土俵で相撲を取らせられたんです。私らにしてみ
れば、「なんで、相撲なんか取らなきゃいけないんだよ〜」。そんな感じだったんですけど、ちょうどそ

の様子を見ていた人がいたんです。師匠（放駒親方＝当時魁傑）の知り合いの元力士の方だったんですが、その方から連絡を受けて、師匠が私のもとを訪ねていらしたんです。

まだ師匠は、現役の力士でした。元大関の現役力士からの勧誘。力士になることなど、これっぽっちも選択肢になかった私ですから、そりゃあ逃げ回りましたよ。高校に行って、砲丸投げや柔道に励む予定だったんですからね。

「柔道でメシは食えないよ」

師匠の一言が、私を後押ししました。

最初に勧誘されてから、東京の部屋に見学に行ったり、東京見物させてもらって、もう後に引けないという状況になっていたこともありましたしね。

昭和53年春場所が初土俵です。

といっても、師匠はまだ花籠部屋所属の現役の関取ですから、私は魁傑の内弟子第一号という形で花籠部屋に入門しました。

北海道の田舎じゃね、まあ中学生という立場では、私はかなり目立つ存在だったんですよ。でも、相撲界に入ってみたら、まわりはみんな大きい人ばかり。入門当時は、185センチで83キロだったのかな？ 身長はまずまずだとしても、83キロじゃガリガリもいいところです。その頃の写真を見ても、細くて心もとない。横綱時代や今の私しか知らない人に見せたら、「これ、ホントに同じ人物なの？」って驚いちゃいますよ。

大阪へ行って、新弟子検査を受ける段階になったら、10キロ太って94キロになっていました。でも、相撲の経験もなかったものですから、二番出世。可もなく不可もないという感じのデビューだったわけです。

当時の花籠部屋には、30人から40人くらいの力士がいました。横綱の輪島関、関脇の荒勢関、そしてのちに師匠となる元大関の魁傑関など、関取衆もすごい面々が揃っています。

そういうたくさんの先輩たちと一緒に、毎日毎日暮らすわけですからね。力士の日々の生活の中では、もちろん稽古が主体ではあるのだけれど、相撲部屋というところは稽古以外の仕事が本当に多いものなんです。先輩方のコマ使い、関取の付け人としての仕事、部屋の用事や仕事、ちゃんこ番に掃除、洗濯……。そしてそれ以外、自分のことも全部自分でやらなければならない。

普通の15歳の少年だったら、そこまでやりませんよね。各家庭だったら、お父さん、お母さんがやっているようなことを全部やるわけですよ。15歳じゃ、やったことのないことばかりです。やったことないことをやらされるわけですけど、間違えたり、なにか失敗したりしたら、すぐに先輩に怒られてしまいます。だけど、それを毎日毎日辛抱していくしかない。その気持ちしかなかったですね。

私がこの世界に入る時に、決めていたことが一つあったんです。

田舎じゃ、ちょっとした力持ちだったかもしれないけれど、中央に出た時にどれだけ自分の力を発揮できるのか。いっちょ、自分の力を試してみようと。そういうチャレンジ精神。それだけを心に決めていました。

15歳で親元を離れて東京に来たわけですからね。たしかに、寂しい時もありましたよ。だけど、そんな状況を親が知ったら、親も心配するだろうと思ってね。小さな町の中のことです。「あそこの息子は

相撲に行ったけど、やっぱり逃げて帰ってきた」なんて言われたら、親に恥ずかしい思いをさせてしまうでしょう。

.....そんなふうに、いろんなことを考えました。だから、やっぱり日々辛抱。毎日の仕事をうまくこなしていくこと。自分がどこまで出世するかなんていうことは、まったくわからない。コツコツやっていくしかない。出世できなかった時は仕方がないんじゃないか.....という思いで、毎日やっていたね。あの頃は。

まあ、要領というのもあるんでしょうけど、私は関取の付け人としても、部屋の仕事にしても、ほぼ完璧にこなしていました。失敗するということがほとんどなかった。とにかく真剣でした。

花籠部屋には3年間お世話になりました。

魁傑関が引退して、放駒部屋を興すことになって、昭和56年の2月に放駒部屋の所属に変わったんです。

放駒部屋に移ってからは、力士の数も少ないですから、師匠から、「二子山部屋に出稽古に行け」と言われて、毎日、二子山部屋へ通っていました。

その頃の二子山部屋は、ちょうど大関の貴ノ花関が引退したばかりで、横綱若乃花関をはじめとして、隆の里関など関取陣がダーツとしましてね。それこそ、古株の先輩方もいっぱいいました。そこで私は、稽古場で毎日毎日引きづられましたよ。毎日「これでもか」っていうくらい。猛稽古です。なにしろ稽古に関しては、二子山親方（元横綱・若乃花）が、とてつもなく厳しかったですからね。手を抜くなんてことは、絶対にできないんです。

56年の春場所、私は三段目の筆頭でした。前の場所、初めて幕下に上がったんですが、3勝4敗で負け越して三段目に落ちていたんです。その春場所は4勝3敗で勝ち越し。私はその場所を含めて6場所連続勝ち越して、なんと1年後の57年春場所で、十両に昇進を決めたんです。

今振り返ってみても、1年間負け越しなしで十両に上がったというのはすごかったなぁと思いますよ。花籠部屋で鍛えられて、さらに二子山部屋の先輩たちに揉まれたことが、知らないうちに、私にとって大きな財産になっていたんですね。

19歳でした。でも、十両という地位は甘いものではありませんでした。新十両で5勝10敗。また幕下に逆戻りしてしまったんですが、その年の九州場所、4場所ぶりに関取に復帰できて、場所前から張り切っていたんです。

九州に乗り込んでからは時津風部屋に出稽古に行きました。ところが、稽古中に右足の小指の甲の後ろの骨が、ポッキリ折れてしまったんです。それで右足を地面の着くことすらできなくなった。骨折ですから、とにかく痛い。

十両から落ちて、悔しい思いをしていました。でも、また関取に戻ることができた。なんとしても九州場所で勝ち越して、関取の座を守りたい。痛くて稽古はできなかったけれど、「足がどうなったとしても、絶対に相撲を取るぞ!」という気持ちで、痛めた足をテーピングで固めて皆勤しました。

場所が終わってみれば、思ってもみなかった10勝5敗という成績。関取の座を守ることができたわけですけど、二子山部屋での稽古でそういう根性もついたし、自然に相撲の力もついていたんですね。私の二子山部屋での稽古は、その後も続きました。

10勝できたことは、大きな自信になりました。翌58年初場所、十両の優勝決定戦に出て、優勝。私にとって初めての優勝となり、春場所で新入幕。

自分でもあれよあれよという間の出来事でした。21歳になった58年九州場所は、絶好調でした。

前頭3枚目で、千代の富士関、隆の里関、北の湖関の3人の横綱を倒したんです。1場所に金星3つという記録は、まだ破られていないんじゃないかなあ？ それから2場所後の59年春場所でも、3横綱を破ったんですよ。地位が関脇だったから、金星にはなりませんでしたが、その頃は「横綱キラー」なんて呼ばれていました。

体重も160キロくらいに増えてきました。稽古をしているから、相手に押されても押されない。そして、引かれても引かれない。そういう自信がありましたね、その頃は。思えば、関脇時代というのは、上位力士を苦しめて当たり前という感じで、とても楽しい時期だったと思います。

昭和60年秋場所、大関に昇進しました。でも、大関に昇進すると、関脇時代とは気持ちがまったく違いました。自分がどんどん追い詰められていくような感じ。大関という位をいただいた時には、「大関は協会の看板なんだから、責任を持った行動が必要だ」ということを、師匠からも厳しく言われましたし、自分にも言い聞かせたわけです。

関脇以下なら、ちょっと活躍すれば三賞がもらえる。でも、大関になったら優勝しかないんだ。いつでも優勝を目指さなければいけないんだと。

でも、思うようにいかない場所が続きました。61年夏場所の逆鉾戦で骨折してから1年くらいは、自分でも満足いくような相撲が取れなかったんです。

62年夏場所、この場所は本当に調子がよかった。体重も200キロを超えていましたけど、動きが悪いとかそういうことも一切なかったです。

千秋楽、北勝海関に勝って、全勝優勝。この一番は、北勝海関の横綱昇進がかかっている一番でもありました。北勝海関は年齢は私より1歳年下ですが、同じ北海道出身の若手ホープということで、何かとライバル視されることも多かったんです。

結果的に私が北勝海関に勝ったことで、北勝海関の横綱昇進を阻止できたものとはばかり思っていたんです。ところが、場所後に、北勝海関は横綱に推挙された。まあ、昇進に関しては、皆さん方の話し合いの結果なのでそれはそれで仕方ないんですけど、私にとっては腑に落ちない気持ちが残りました。

全勝優勝を果たしたことで、一気に「横綱獲り」というものが見えてきました。翌名古屋場所では12勝しましたが見送られて、次の秋場所で13勝。3場所のトータルが40勝というのは、横綱に昇進した力士の中で一番成績がよかったんです。その後、貴乃花が41勝を挙げて、その記録は破られてしまうんですが...

そういう状況の中での横綱昇進でした。

推挙された時には、これからは大関の時以上の責任を持って相撲に取り組まなければ。そして、「これしかないんだ」という気持ちでいかなければいけないと思いましたね。

ところが、昇進した場所は8勝7敗。翌場所は肝機能障害も見つかって、休場。昇進早々、横綱の責任というものが、重くのしかかってきました。そういう中で、63年春場所で、2度目の幕内優勝ができた時は、ホッとしました。千秋楽に北勝海関に勝って、決定戦でも彼を破ったことも大きかったですね。

ちょうどその後から、千代の富士関の連勝が始まりました。無敵の横綱千代の富士の連勝記録に、日本中の期待がかかっていたような雰囲気でした。同じ横綱として私は、それを黙って見ていたわけでは
ありません。

ちょうど昭和最後の場所になった63年九州場所千秋楽、横綱同士の決戦で私が千代の富士関に土をつ
けた。福岡国際センターの異常な盛り上がりは、今でもハッキリ記憶に残っています。

今でも皆さんに、「千代の富士関の連勝記録を53でストップさせた時、どんな気分でしたか？」と聞
かれることがあります。53連勝を止めたということは、相撲界そして世間の皆さんにとって、大きな話
題であることは間違いありません。でも、私にとっては、なんてことないことなんですよ。

それはなぜかというと、私は同じ横綱として、千代の富士関をそこまで連勝させてしまったという責
任があるからです。その前の秋場所も、そして名古屋場所でも、千代の富士関と対戦して、私は負けて
いるんです。連勝は止めたかもしれないけれど、「バンザイ、バンザイ」なんて、喜ぶわけにはいかな
いかったんです。

昭和が終わって、平成へと元号が変わってからは、私はヒザのじん帯を痛めるなど、ケガに悩まされ
るようになりました。

そして、平成元年秋場所、私は横綱でありながら、7勝8敗で負け越してしまいます。15日間皆勤し
て負け越した横綱は、昭和に入って2人目だと後で聞きましたが、存命している横綱の中では私だけだ
ったようです。その後、3代目の若乃花も負け越しがありましたね。

千秋楽を迎えた時に、7勝7敗。横綱が千秋楽の土俵で7勝7敗で勝ち越しを賭けるなんていうこと自体おかしいのかもしれないけれど、人間というのはやっぱり好不調があるわけですよ。横綱は、神様や仏様じゃない。生身の人間なんだから、風邪を引くこともあるし、おなかを壊すこともあります。

でも、「横綱とはこういうもの」という意識が、皆さんの中に植え付けられているんだと思うんです。だから、成績が振るわない場合は、休場するという状況になってしまうわけです。でも、成績が悪いからと言って必ず休まなければいけないという義務付けはありません。成績が悪くても、全力を尽くして戦ってこそ、横綱。

たとえば、「こんなの横綱の成績じゃないだろう」と言われたとしても、やっぱり全力を尽くして戦うという姿は潔いと私は思っています。それを批判的に思う人、好意的に見てくれる人の割合は、何対何くらいなのかと言われたら、私にはちょっとわからないけれど、私はこの負け越しを恥じてはいません。

なぜかというと、最初に言ったように、私は相撲界に入ってきた時に、自分の力をこの世界でどこまで出せるかを試したいと思っていたからです。

相撲協会や師匠の立場からすれば、横綱で負け越すなどということは、不名誉極まりないことだと思うでしょう。実際、恥じてはいないけれど、本当に苦しかったです。ですけど、自分の人生にとってみれば、大きな勉強になりましたし、その後の肥やしになっていると思っています。

負け惜しみじゃないですけど、そういう経験をした横綱はほとんどいないんですから。好成績を挙げた横綱は大勢いますけど、私はワーストですからね。それでもいいんです。これが私の生き方なんです。

私の心の中に大きく刻まれていることは、「初心忘れるべからず」という言葉です。横綱という立場であっても、緊張感を忘れないで、しっかりやっていかなければならないというね。人間は迷います。迷った時には、原点に戻ってみよといいますよね。初心というものは、大切なことなんです。

私は結婚披露宴でスピーチさせていただく時などでも、初心が大切だということを申し上げています。今の気持ちが大切なんだよ。これから先、夫婦生活は山あり谷あり。いいことばかりじゃありません。ケンカだってするでしょう。でもそんな時は初心、原点に戻ってみなさいということです。

平成元年秋場所の負け越しの後、足首の骨折などのケガも加わりました。

入門して、十両に上がって、幕内力士になって。大関に昇進し、横綱に推挙された。「自分の型を持った、最強と言われる横綱になりたい」という気持ちは、自分の中で持ち続けていました。それでも人間というものは、それぞれ性格が違うし、感情というものもある。自分が考えていることと、結果とがうまく噛み合わないことも多々あります。

平成2年の春場所から、4場所連続で休場となりました。

その頃からでしょうか。体に力が入らないというか、自分の体が自分のものじゃないような感覚になってきたのは。

睡眠時無呼吸症候群という病気が、まだ世間に知られていない時代です。体の不調を訴えたところ、医師からそういう診断を受けたんですが、世間の人はもちろんのこと、部屋の師匠もでさえ、そのような病気そのものがわからないという状況でした。

そういう中で、私の体がだんだん痩せてきたものだから、師匠から「なんかヘンな薬でも使っているんじゃないか」と怒られたりもしました。それで、きちんと医師からと師匠に説明をしてもらって、そこでようやく「ああ、おまえは病気だったんだ」とわかってもらえました。

病気であることを師匠に理解してもらった時には、少しホッとしましたけど、実際にその病気になった人じゃないと、苦しみがわからないことが多いものです。きちんと眠れていないから、いろんなところに影響が出ていたんですね。

28歳になっていました。自分の体もそうですが、精神的に参っていました。もし、精神的に参っていなかったのであれば、まだ相撲を取れたのかもしれない。でも、追い詰められて、追い詰められてという状況だったし、「自分自身」というものに戻る時間も取れませんでした。それは、自分の心の弱さでもあったんでしょう。横綱じゃなくて大関のままだったら、私はまだ相撲をやっていたのかなあ……とか。そういうことは考えちゃいけないことなんですけどね。

新旧の大関陣を見てみると、何度もカド番を繰り返して、ギリギリ抜け出していく人も多いじゃないですか？ 考えてみたら、横綱に昇進したら、それができないわけです。成績が悪かったら、みんな辞めていかなければならない。

横綱と大関の違いを端的に説明すれば、たとえば横綱と大関が崖っぷちに立たされたとします。それで、「あなた方は成績が悪いから、そこから飛び降りてください」と言われた時、大関なら180度翻って、「俺はイヤだよ」って戻ってこられるけれど、横綱はそこから飛び降りなければいけないんです。

こう言えば、横綱という地位の重みをわかってもらえるんじゃないかなあ。

だから、横綱というのは、やっぱり孤独ですよ。要するに、前には行けるけど、後ろには戻れない。前に進むしかないという立場に置かれているわけですから。そしてもちろん誰も助けてはくれません。

まさか、28歳で引退するということになるとは思っていませんでした。2回の幕内最高優勝は本当にうれしい思い出です。準優勝を9回くらいしているということも、自分の中で誇れる記録ですね。

こんな若さで引退するはずじゃなかったものですから、しばらくは師匠のもとで親方としての修行を積みました。引退したのは早かったけれど、自分の部屋を持ったのは引退から8年後のことです。

私が興した芝田山部屋は、他の部屋に比べれば弟子は少ないです。だけど、こういう時代に私の部屋の門を叩いてくれた弟子には、立派な社会人になってもらいたいと思っています。良いことはいい。悪いことは悪い。相撲の稽古だけじゃなくて、生活面も厳しく指導しているつもりです。

その厳しい指導についてこられずに、たとえ弟子の数が減ってしまったとしても、それは仕方ないことだと思います。やはり、自分の信念は曲げられません。私の部屋の玄関を見ていただくとわかるのですが、朝でも昼でも夜でも草履がピシッと並んでいます。相撲部屋は団体生活ですから、規律正しく生活することは重要なことだと考えています。

もしかしたら、私は少し厳し過ぎるのかもしれませんが。でも、なぜそこまでしているかというと、この相撲界で出世して、相撲界でずっとゴハンを食べていける人というのは、ほんのひと握りしかいないからなんです。だからこそ、相撲を辞めて別の世界に行った時に、大学を卒業した人たちに負けない、人間としての基礎を作ってあげたいと思っているわけです。

毎年、私の部屋では田舎の田んぼに行って、米作りをしているんです。私、力士、裏方さんみんなです。収穫する時の喜びというのは、何物にも変えられない。自然と触れ合うことが、またすばらしい。

人間というものは、自然界の生き物です。自然の中で人間は生かされていると私は思っています。自

然の中にある空気の恵みをいただいでいて、生きている。そこに食べ物もあります。

稲作は一つの例ですけど、自然と触れ合って息抜きをすることで、いろんな人と知り合ったり、自然に人との輪もできてくる。そういうことで人生を豊かに、楽しく生きていくことができれば最高ですね。

力士が出世するかどうかというのは、正直言ってわかりません。もちろん、応援してくださっている人たちからすれば、早く出世してほしいと願っているでしょうし、師匠の私もこの子たちを出世させてやりたいと望んでいます。だけど、それは流れに任せるしかないんです。人それぞれ、今、自分のやらなければいけないことを精一杯やるだけ。そうしたら、なんらかの結果が出てくるのではないかな。私はそう考えているんです。